

所属・氏名（ 看護学部 看護学科 氏名：宮本 純子 ）

著書、学術論文等の名称		単著 共著 の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌 等又は発表学会等 の名称	概 要
1	(学術論文) Community resilience of women in rural areas of Lempira in the Republic of Honduras	共著	2023 年 12 月	Población y Salud en Mesoamérica21(2)	2020 年にコロナ渦でハリケーン被害を受けた ホンジュラス共和国で、女性を対象にコミュ ニティレジリエンスに関する調査を実施。 人々は自宅では備えをしていないが、リーダ ーがトレーニングを受けていることで備えが できていると認識していた。コミュニティレ ジリエンスに対し、結束型ソーシャルキャピ タルはマイナスに働き、橋渡し型ソーシャル キャピタルはプラスに働いた。初等教育修了 者と未修了者との間でレジリエンスの差があ ったが、それ以上の学歴の人とは差がなかつ た。災害対応を考える上では、現地の文化を 理解する必要がある。また、初等教育の重要 性が明らかになった。 < <u>Junko Miyamoto</u> , Minato Nakazawa >
2	(学術論文) Communication for self-care and the role of a logbook on health risk during a flood disaster 《筆頭論文》	共著	2023 年 3 月	Health Emergency and Disaster Nursing 10(1) 29-40	平成 30 年 7 月西日本豪雨災害で被災したログ ブックの利用者への聞き取り調査を実施。被 災当初は、目の前の出来事に対処することで 精一杯であったが、被災後 2 ヶ月目は、経験 を振り返る時間を持つことができるターニン グポイントになっていた。その際、直面する 問題についての情報共有が重要であることが 確認された。ログブックの役割は「振り返り に役立った」「心が安らいだ」「連絡に役立っ た」「季節の行事を思い出させてくれる」な ど。外部からの支援が困難な災害時であって も平常時に培ったセルフケアや地域社会との つながりが不可欠であることが示唆された。 < <u>Junko Miyamoto</u> , Noriko Hatakeyama, Sakiko Kanbara >
3	(学術論文) COVID-19 感染者が救われ たと感じた言葉掛けやサポ ート—軽症者療養施設入所中の 療養者への調査から	共著	2022 年 11 月	地域保健 11 月号, PP56-59	兵庫県下に設置された4つの宿泊施設に入所し た 16 歳以上の者を対象とした。調査は第3波の 期間に行った。感染者が抱える感染や宿泊施設 での療養に対する不安や心配は、【診断がつく までの不確かさと恐怖】【診断直後のパニック】 【家族への影響】【疾患の感染性】【症状・病状の 経過】【宿泊施設での療養生活】【療養期間終了 後の社会生活への復帰】であった。気持ちが楽 になった、救われたように感じたサポートや言葉 掛けとして、【休息を促し心身を気遣う言葉掛け】 【罪悪感を和らげる言葉掛け】【メール等での継 続的なやりとり】【体調の把握や確認と症状経過 の説明】【保健所(保健師)からの毎日の電話】 【安心できる口調での会話と傾聴】【すぐに対応し てもらえることへの安心感】【不安への気遣いと対 応】等が挙げられた。 < 高田大樹, 牛尾裕子, 稲垣真梨奈, <u>宮本純子</u> , 水川真理子, 藤田さやか, 増野園恵 >